

# 松前藩戸切地陣屋跡桜並木 北海道北斗市野崎

山上 勝治（5期）

## はじめに

道南の桜の名所である、北斗市にある‘松前藩戸切地(へきりち)陣屋跡桜並木’について、陣屋とそこに植えられた桜並木の歴史的背景や現況などについて思い付いた事をまとめてみました。北斗市には、ほかに法亀寺のしだれ桜、清川千本桜、大野川河畔桜並木、八郎沼公園 などの桜の名所が存在します。戸切地とはアイヌ語でペケレ・ペ「澄んだ・川」を意味します。

江戸時代に南下するロシア対策の為に築かれたのが松前藩戸切地陣屋です。そこに明治時代、日露戦争での勝利を記念して植えられたのが松前藩戸切地陣屋の桜並木です。令和に入りロシアによるウクライナに対する軍事侵攻が続く中、ロシアと国境線を持つ日本は、有事の際どのような選択をするのでしょうか、国境問題はあいまいな状態が続いています。



## 松前藩戸切地陣屋とは

江戸時代末期 1854 (安政元)年 1月、ペリーが軍艦 7 隻を率いて浦賀沖に停泊、幕府に開国を迫る。3月、日米和親条約締結により下田・箱館港が開港となる。1855(安政2)年 2月、日露和親条約締結により北方の領土国境線確認。幕府は、北方からの勢力(ロシア)に対する防衛のため函館平野一帯の警備を松前藩に任せる。その拠点として 1855(安政2)年に北斗市野崎の地に築いたのが‘松前藩戸切地陣屋’である。松前藩によって日本で初めて築かれた稜堡式築城術を採用した城郭だった。これは稜堡式城郭(星形要塞)の代表である五稜郭の竣工(1864(元治元)年)の9年前の事だった。北方史・築城史における価値により、1965 (昭和 40) 年に国指定史跡となっている。



## 日本最初の星型の城郭ができるまで

1700 年代初め頃、ロシア人による蝦夷地 (千島列島から択捉島) 方面への南下が始まった。幕府は千島の守りを固めるため 1785(天明 5)年に千島に調査団を送り、1800(寛政 12)年には択捉島に「大日

本恵登呂府(だいにほんえとろふ)」と書いた柱を建て、日本の領土であることを示した。さらに1801(寛政13)年からは択捉島に役人を送り、択捉島の守備を行った。この頃は、日本とロシアの間に正式に国境が決まっていなかったため、択捉島にあった日本人の村々が襲われ、樺太(サハリン)では和人拠点近くに砦が築かれ進駐されるなどの事態が発生した。一方で、当時盛んだった欧米諸国の捕鯨に伴い、蝦夷地近海に外国船が次々と出沒するようになるなど、鎖国政策をとっていた当時の日本にとって蝦夷地は対外国防衛の最前線となっていた。蝦夷地各地に外国船を警戒する番所が築かれ、北方諸藩が防衛にあたった。この時に松前藩が割り当てられたのが、箱館奉行所が所在する函館平野・大野平野・函館湾一帯の警備だった。これを統括する防衛拠点として松前藩戸切地陣屋(国指定史跡)は築かれた。

### 松前藩戸切地陣屋跡桜並木の始まり

この桜並木は松前藩戸切地陣屋跡表門から道道上磯峠下線までの間総延長 800mの大手前大通り両脇に植えられた樹齢120年近い染井吉野 約280本からなる並木である。

1905(明治38)年日露戦争の戦勝記念として、函館市在住であった呉服商岩船峯次郎が陣屋の正面道路に染井吉野を植えたことから桜並木が作られ現在に至る。岩船峯次郎は函館市内見晴町に本格的な風景式庭園「香雪園」(国指定文化財名勝庭園)を造った人物としても知られている。香雪園は1898年から作庭がはじめられ1907年にはすでに地域における景勝地となっていた。芝生広場周辺に植えられている染井吉野は、年代的に戸切地陣屋の染井吉野とほぼ同時代に植えられた桜と言える。

### 植栽後120年の桜並木

近年、「松前藩戸切地陣屋桜並木」における桜の景観不良が指摘されるようになってきた。花数の減少、生育不良、枝枯の放置、モルタル充填の破損等が見た目を悪くし景観不良を印象付けている。一部に大木化し、通常の管理作業に支障をきたす樹高となっている個体も確認される。このまま放置すれば現状悪化がさらに進み健全な桜並木の存続が危ぶまれる。また折損落下が懸念される枝も確認され、利用者の安全確保の面からも延命処置による改善が望まれる。

安全で健全な桜並木の景観を回復し末永く維持していくには、生育状態や被害状況の全数調査による現状把握と対策、個々の状態に応じた樹木管理・治療が有効となる。



**写真-1 戸切地陣屋桜並木全景**：黒い幹と白い花が老齢桜の魅力を引き立てる。植栽間隔は狭いが雄大に育っているのが魅力でもある。

**写真-2 過去の治療(モルタル充填、被覆)痕**：地元の有志によって施された幹腐朽箇所のモルタルによる保護跡、劣化破損が激しい状態。北斗市(旧上磯町地区)はセメント工場で有名な町である、そのためか？充填資材にモルタルが選択されている。ラス網材を使用し表面は円滑に仕上げ塗装をするなど丁寧な処置がなされている。樹木治療にモルタルの使用は違和感を覚えるが、不定根が養分吸収する木部腐朽材の流出が防がれ、不定根の乾燥防止にも役立っている。

るようだ。不定根の肥大成長と共に進むモルタルの劣化も現況を視ると自然な経過と言え、結果オーライと言える。見た目の改善含め、今後の修復、保護は急務と言える。

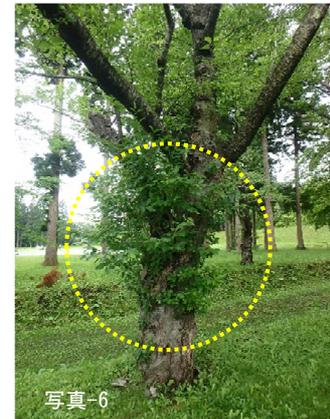
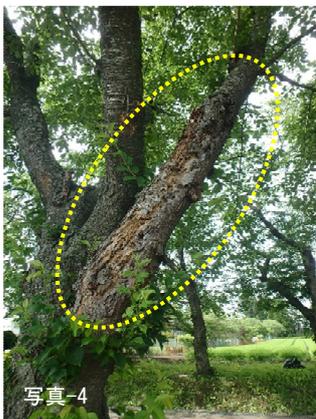
**写真-3 低い位置の萌芽枝：**萌芽枝(胴吹きやヒコバエ)や不定根の保護育成は老齢樹木の維持、再生に不可欠である。優良な枝や根を選抜育成する際に、桜本体の腐朽の進行程度と更新させる枝の素性や位置選択が大切になる。特に本体の腐朽が進行し生育部が少ない場合は、地際に近い萌芽枝の育成が有効となる。



**写真-4 骨格枝の樹皮欠損、腐朽：**程度にもよるが、主幹以外の腐朽が進んだ骨格枝、大枝は将来的には更新の対象となる、代替えの枝の育成を行いながらタイミングを見て剪定更新を行う事が望ましい。

**写真-5 頂部、側部の徒長枝：**通常作業(高所作業車使用)範囲内で、管理作業が可能な樹形、規格を維持する事が望ましい。

**写真-6 胴吹き枝：**胴吹きやヒコバエは大切な更新枝となる。素性を見極め優良な物を選抜育成する。



おわりに

代々受け継がれる樹木を良好な状態で維持し後世に伝えるには、地元自治体を核とした地元の方々と連携し引継いでゆく事が大切です。樹木の生育年数を考えたときに個人が関わりを持つ期間は、樹木にとっては、ほんの短い期間にしか過ぎません。私たち樹木医が行う保護・育成活動を次世代へつなげていく事が重要と考えます。今回の考察をきっかけに、その土地や桜の歴史を知り、さらには古くからある日本と周辺国との関わりを再認識する良い機会となりました。

**【参考資料】** 函館経済新聞 HP 北斗市 時田太一郎主任 歴史資料、外務省 HP 北方領土関連資料